

有明海水産資源回復技術確立事業*

アゲマキ増養殖技術開発試験（アゲマキ移植による養殖技術開発）

重久剛佑・佃 政則・野田進治・山口大輝・大渡功晟

当センターでは、有明海の重要な水産資源の一つであるアゲマキの資源回復を目的として、1996年度から母貝集団の創出に向け、種苗生産及び放流技術の開発に取り組み、殻長8mmサイズの稚貝を200万個規模で生産する技術を確立するとともに、一定程度の母貝集団を創出する放流技術の開発に成功している¹⁻⁶⁾。また、生産技術の進展に伴い、殻長2mmの稚貝でも数百万個の単位で一定程度生産することが可能となった。

かつて、有明海佐賀県海域で行われていたアゲマキの地撒き養殖は、春先に沿岸域で殻長2~3cm程度の稚貝を採取し、生残や成長が良い沖合へ移植していた。この従来から行われていた養殖スケジュールを活用し、人工種苗の移植による養殖が可能か検討したので、その結果を報告する。

方法

2021年12月に鹿島市浜地先で殻長2mmサイズで放流し（図1）、5月までに平均20mmまで成長したアゲマキ稚貝を、2022年5月21日に取上げ、密度を200個/m²（低密度）及び400個/m²（高密度）に調整し、地盤高4.0m（高地盤）及び3.0m（低地盤）の2カ所に各3例ずつ移植した。食害防止のため、防鳥ネットを用いて区画全体を被覆した。

移植後1~2か月の頻度で生残及び成長について調査した。生残状況については、方形枠を用いて目視により生息孔を計数し、生息密度から生残状況を推定した。成長については、調査時に5~10個体を採取し、現場でノギスを用いて殻長を測定した。

結果

高地盤区の密度は、低密度及び高密度区共に7月まで大きな低下もなかったが、高密度区では8月から低下し始め、低密度区でも9月に数個/m²へと大きく低下し、その後生残個体を確認することができなかった（図2）。低地盤区では移植後徐々に密度が低下し、6,7月に移植当初の50%程度となり、9月には生息を確認できなくなった。

殻長については、いずれの区画でも7月までに約35mm

まで成長した（図3）。8月は高地盤区のみで測定を行い、40mm前後に達した。9月は生残個体が確認できなかったことから、殻長の測定が出来なかった。

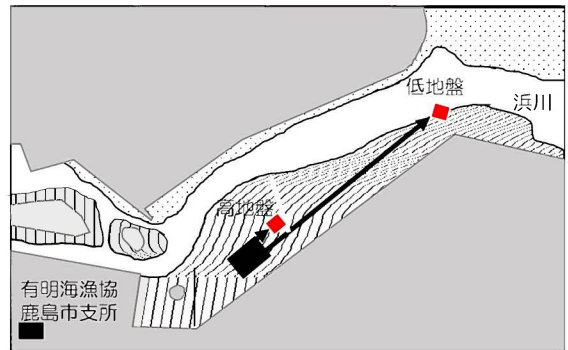


図1 移植地点図

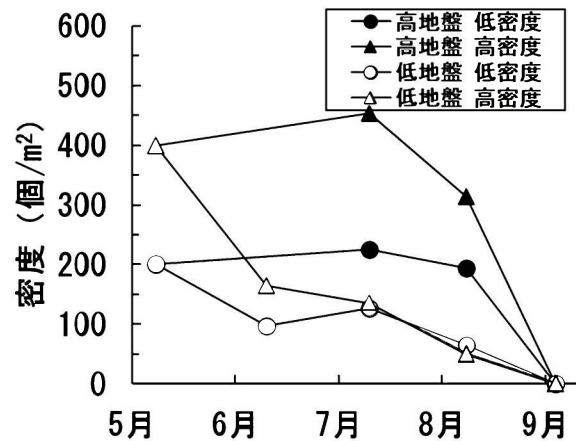


図2 移植後の放流区画の生息密度の推移

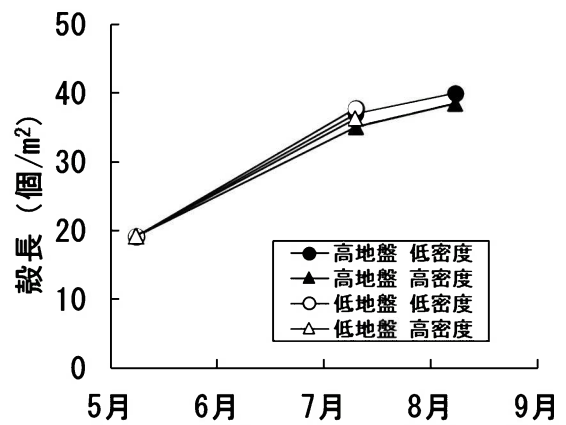


図3 移植後の放流区画の殻長の推移

*国庫補助事業名：有明海漁業振興技術開発事業

文 献

- 1) 大隈 斉・江口泰造・山口忠則・川原逸朗・伊藤史郎(2003)
: 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟, 佐有水振セ研報. (18), 21-24.
- 2) 津城啓子・大隈 斉・藤崎 博・有吉敏和(2009): 有明海
におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟-II, 佐有水振セ
研報. (24), 1-4.
- 3) 津城啓子・佃 政則・大隈 斉・古賀秀昭(2013): アゲマ
キ放流稚貝の生残・成長と底質(物理環境)との関係, 佐
有水振セ研報. (26), 93-100.
- 4) 佃 政則・神崎博幸・福元 亨・梅田智樹・荒巻 裕・伊
藤史郎(2017): 被覆網による放流後のアゲマキ稚貝の散
逸対策, 佐有水振セ研報. (28) . 43-45
- 5) 佃 政則・野間昌平・神崎博幸・福元 亨・野田進治・梅
田智樹(2019): 被覆網を用いたアゲマキ放流条件の再検
討, 佐有水振セ研報. (29) . 5-9
- 6) 野間昌平・大庭元気・重久剛佑・野田進治・佃 政則(2021)
: 被覆網を用いたアゲマキ放流手法の高度化, 佐有水振セ
研報. (30), 26-30.